

平成24年度 大学院工芸科学研究科博士前期課程 学位記授与式
学長告辞

本日、修士の学位を取得されました皆さん、誠におめでとうございます。
また、皆様をこれまで、支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申しあげたいと思います。

本学の修了生は、これまでも、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者としてのキャリアを踏み出していきました。これは企業や社会から定評を得ている事実であり、私たちは、皆さんの能力や知識について、自信と確信を持っており、心配もしておりません。もし一抹の不安があるとすれば、それは、あなた方が、やり残した実験や資料収集のことではありません。そうではなく、自然や物質を相手にした仕事に熱中するあまり、人間とは何か、自分とは何か、愛とは何か、といった人間や社会にとって重要な課題を、ときには無意識に、ときには意識的に、面倒なものとして正面から向き合ったことがないのではないかという反省です。人間や社会について、深く悩み、自ら思考した時間の厚みが、専門分野の学習や研究に比して少ないのではないかという反省です。

今日、君たち修了生を世に送り出すにあたって、専門領域以外の、現代社会の最も困難な存在、逃げることのできない課題である人間について触れないわけにはいきません。

そもそも、人間とは何か？ こうした問いに答える場合、旧来は、哲学的な洞察によって、「人間とは考える葦である」というパスカルのステートメント、あるいは、自分とは誰か？という問いかけに対して、「我思う故に我あり」というデカルトの省察をもって回答し、その後の歴史的展開を考察するのが普通であります。しかし、20世紀の後半には、構造主義の台頭とともに、医学、生理学、心理学における観察データに基づき、より根源的な人間の像が提起され、人文社会学の諸領域を席卷していくことになります。これまでにない、厳しく苛烈な人間観が提起され、人間や社会の構築に関する議論に影響を与えています。

近年、人間に関する考察は、言葉と主体、言葉と精神が主題となっています。我々の思考は言葉によってなされます。我思う故に我あり、というデカルトが築いた「理性的人間」という像、これは正しい認識を積み上げることによって、正しい生活と良き社会を作り上げることができるという

考え方です。これに対してフロイトは、精神分析を行う中で、さまざまな患者の語る言葉を聞き、夢や言い間違いや、自分でも意味の判らない行動など、主体による理性的な統制を受けない言葉の分析を行いました。その結果、無意識という領域を発見し、この無意識という、ひたすら満足を求め続ける欲動の領域こそ人間の本体であるという考えを打ち出しました。

(1) 人と動物の違い 想像界と象徴界

例えば、岸田秀は「人は本能の破壊された動物である。」という主張を展開します。しかも、正常の中に異常が混入しているのではなく、人はすべからくもともと異常な動物であるという主張です。人間の特徴を考える場合、動物と比較するのが自然な方法でしょう。人間は動物と異なり、言葉を話し、道具を用います。逆に言えば、人間は動物に比して、過剰な能力や余分な道具を用いなければ、自らの生を全うできない生き物です。動物ならば、生まれつき定められたプログラムに沿って、巣を作り、獲物を捕獲して生きていくことができるはずです。しかし、人間は本能が破損した欠陥動物であり、本能のプログラムに沿って、人生を全うすることが困難な生物なのです。この原因については、ボルクの幼体成熟説やポルトマンの早産説が重要なポイントとされています。

人は、未成熟なまま生まれてくるため、幼児期には、立つことも、歩くことも、座ることさえできない無能な生き物です。ここでは親の庇護がすべてであり、私たちは、自他の区別なく、欲求が満たされる全能の状態から人生を始めます。人はその後もこの幸せな状態を復元したいという幻想にとらわれます。ここから個体保存の本能が幼児期の幸せな状態を幻想として保存する方向へとズレていきます。また人間は、身体的な成長と精神的な成長の時間的ズレによって、生命保存の本能の発露が個人によってまちまちとなり、調和ある展開が保証されないのです。したがって、人間が作り上げてきた文化とは、本能の代理物であり、ひたすら満足を求める無意識の欲動と現実社会との調整機構にすぎないという考え方です。

岸田秀はこのように、フロイトの発見した無意識の領域の特性、ひたすら欲望を追求し続ける領域に着目し、この考え方を突き詰めて、人間は錯乱した動物であり、正常に対して異常があるのではなく、元々本能の破壊された動物であるという主張に達したわけです。

良き人である自分と同様に良き隣人との間での友好関係をいくら分析しても、何も得られないのが今日の状況です。人間は、自分でも正視しがたい欲望を抱えた生き物であり、わがままであるだけでなく、危険な存在であることを受け入れなければなりません。私たちは自らを、社会人へと

育成していかなければなりません、この認めがたいほど過酷な事実をから目をそらさずに、受け入れることによって、人間として成長することができるのだと思います。

（２）無意識は言葉のように構造化されている。

一方、パリの精神分析医であるジャック・ラカン、フロイトの発見した無意識の領域を、構造主義の立場から探究し、新たな人間に関する興味深い概念を提示します。有名な「無意識は他者の語らいである」というステートメントもその一つです。主体の核をなす無意識の領域、無意識の欲望は、実は他者の言葉によって構成されているという主張です。これはどういう意味でしょうか。

例えば、子供が、ケーキを食べる夢をみる。この夢は、普段ケーキが食べられない子供が、せめて幻想の中で自分の欲望を満たしたいということの意味しているわけではありません。かつて自分が喜んでケーキを食べている姿を、親が喜んで見ていた。親が満足している姿と自分が喜んでケーキを食べている姿を結び付けて、親を喜ばせる自分、親の愛の対象である自分を、幻想の物語の中で確認したいということの意味しています。

幻想とは、叶わぬ夢を満たすための仮想の物語ではありません。幻想の中で演じられる物語は、主体の欲望ではなく、本当に言いたいことは何か、という問に対する答えなのです。そもそも主体の欲望とは、「自分は何を欲するか」ではなく「他者は私に何を欲するか」であります。「私は他者にとって何であるのか」という問いに対する答えは、「私は他者の欲望に値する」というものです。平たく言えば、「私の喜びは、自分の欲望が満たされること」というよりも、「あなたに喜んでもらうことこそ、私の真の喜びです」ということになります。他者が私に求めることが、私の精神的な核を与えることになります。

精神的な核と同様、社会的な意味における核もまた、外部からやってきます。私たちは一人一人、自分の名前を持っていますが、その名前は自分の外からやってきます。自分の名前は、可能世界を貫通するIDコードであり、死んだ後も自分を同定するために使用されます。固有名は私たちにとって、重要な役割を果たす単語であるにもかかわらず、自分とは無関係に、人生の初期条件として外から与えられます。人生は、生まれたときす

でに与えられた名前という箱の内容を作り続ける作業であるということもできます。

大学の名前も同じです。京都工芸繊維大学は固有名であり、これまで何千、何万という卒業・修了生の皆さんが、一人一人の人生を費やして、その内容を作り上げてきた歴史的な構築物であります。大学名称は、我々にとっては外から与えられたものかもしれませんが、自分の名前と同様、分解したり改変したりすることは意味をなさないのであります。変更できるのは名前ではなく内容の方です。京都工芸繊維大学も同じことであり、時代の変遷の中で、IDコードとしての役割を果たすものは、京都工芸繊維大学という固有名なのであります。一方、京都工芸繊維大学の内容は、皆さん方一人一人の活躍の歴史、私たち全員の人生の集積が京都工芸繊維大学の内容を形成し続けるのです。その意味で、逆に、京都工芸繊維大学とは何かという問いに対する答えは、皆さん方の将来にわたる活躍の集積を京都工芸繊維大学と呼ぶのだということになります。

(3) 大学を愛すること

結びにあたり、学長から修了生諸君にお願いがあります。

私は、皆さん方が、修了後も大学を愛することを心から願っております。

皆さんが学び、青春の大切な時期を、人生の大切な時期を過ごした大学は、日々楽しい楽園であったでしょうか。多くの人は、苦しい修業時代と研究過程を乗り越え、今日の良き日を迎えられました。その意味では、達成感と満足感を持っておられると確信します。しかし、同時に、大学は青春の楽園と言うには、様々な不備な点や欠点もあり、皆さんに苦しみを与えたこともあるでしょう。それでもなお、私は、皆さん方が、修了後も大学を愛することを心から願っております。

人を好きになる場合、彼等は研究がよくできる、彼等はお金持ちである、といった個別の理由を並べ立てても、好きになる理由を説明することはできません。人は利益のカatalogで人を愛するわけではありません。人は分析できない理由によって人を愛します。大学においても事情は同じであり、皆さんも理由なく、なぜか京都工芸繊維大学を好きになっていただきたいと念願しています。

母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。松ヶ崎の地において、私たちは常に世界とつながっており、皆さんを見守っています。皆さんは、私たち教育者の誇りであり、京都工芸繊維大学が世界一の

大学であるという確信を持って、修了していただきたいと思います。

平成25年3月25日
京都工芸繊維大学長
古山正雄